社会科教育とアクティブ・ラーニング
―「自ら学び取る」ための哲学教育―

鴻　浩介

こと「教える」という点において哲学という学問が自らに与える一つの自己規定は、ほとんどその誕生の瞬間から今に至るまで忘れられることなく意識され続けてきたと言ってよい。ソクラテスは問答において答えを提示するのでなく、むしろその中で相手が自ら、能動的に新たな知（あるいは自覚的な無知）へ到達するのを助けることを自らの役目とした。よく知られた「産婆術」である。またカントは「決して哲学を学ぶことはできず、できるのはせいぜい、哲学することを学ぶことである」という、これまた非常によく知られた言葉を書き残している。これらの史実によって象徴されているのは、単なる知識伝達の形で哲学を教えることはもとから不可能であり、ただ自ら学び取ることによってのみ哲学は習得しうる、という信念である。その意味で、アクティブ・ラーニングの重要性の認識は哲学史そのものを貫いて共有されている。

しかし、なぜそうであるのだろうか。大雑把に述べてしまうならば、それは哲学的思考の本質がその内容よりも、むしろその様式によって定義されるものであるからだ。一切の予断を許さず厳密に、論理的に反省を積み重ねる思考のあり方が哲学の本質であり、そのような思考能力をいわば「体得」することこそが哲学の訓練を積んだ第一の証となる。そして、その能力は自らの積極的関わりなくしては獲得し得ない。ちょうど自動車の運転技能が、テキストを読むことでなく実地での運転経験によってはじめて体得可能なようにである。

以上の点に鑑み、担当科目である「哲学概論」をできる限り「自ら学び取る」授業にするために私が特に心がけている事柄を挙げるならば、それは「動機づけの重視」及び「開かれた授業構成」である。まず、一見抽象的で難解とも見える哲学の議論が、その実身近で「面白い」問題として実感可能なものであることを、ニュース映像・新聞記事・映画など身近な題材を用いて示し、主体的な学びを動機づけるよう努めている。また歴史上の哲学者たちの議論を教授しつつも、それを絶対的正解として提示し暗記させるのではなく、あくまで一つの仮説として提示する。その上でそれへの擁護・批判双方からの議論を紹介し、最終的な態度決定は学生一人一人に委ねる、という開かれた形での授業構成を意識している。場合によっては形成された意見をリアクション・ペーパー等で自由に表現してもらい、優れた意見を後の授業で紹介することもある。更なる動機づけの循環が生じるのを願ってのことである。